

時代と共に女性は

甲斐市立敷島中学校二年 浅川 菜央

寒い朝のことでした。学校へ出掛ける私の姿を見て「こんな寒い朝はスラックスで行けるといいのにね」と母は心配そうに言いました。私は、北風の吹く歩道を歩きながら（まさかあ冬の制服にスラックスなんて）と心で笑いながら学校へ向かいました。

そんな会話後、しばらくして山梨日日新聞にこんな記事が載りました。郡内のある高校で、制服のリニューアルを控え、PTAの会合が持たれました。その折、一人のPTAの役員が「スラックスはないのですか」と質問をしたのです。しかし、教員による制服委員会は、夏休み明けには、生徒の投票を控えていたため、既に3案にしぼりこんでいたのです。その3案の中には、女子のスラックスは、入っていませんでした。質問をしたその人は、娘を持つ母親のPTA会員から、寒い地方の高校で、成長期の娘が冬の寒さから体を冷やすことへの不安を聞いていたので、会合の場で発言をしたのだそうです。生徒の投票後、女子の防寒対策として改めて協議をした結果「スラックス」が導入されたのだそうです。発言したPTAの役員は「性自認に疑問を持つ子もあり多様な選択肢があるべきで、動いてくれてありがたい」と語っていたそうです。

私も制服の多様性は、ジェンダー平等を実現する上で、重要な要素の一つであると感じスラックス導入が受け入れられたことにホッとした思いです。

性別で役割分担を固定しない例が子どもたちの教育現場や保育現場にも見られます。県内のある保育園で、鼓笛隊でマーチングの旗を持つガード隊を女の子、大太鼓・シンバルを男の子に限定し、練習しようとした矢先「大太鼓、女の子もやっていいの」と言う女の子の言葉に、園でも子どもたちが「やりたい」と言う気持ちの可能性を、育てようと教育を担う現場の意識を変えていく必要性を感じ、男女問わず役割分担をするという方向に決め、女の子の声を受け入れたそうです。

性別による固定概念を小さい頃から排除して行くことは、これからの女性が、家庭・地域・社会の中で、男女共に活躍できる基礎として必要なことと思います。

女性の生き方が活発化しつつある以前の女性たちは、差別の中で生きてきたそうです。曾祖母の時代は、女性の地位は極めて低く、男性有利の家族の中で

生活をしいられ、女性の教育や自由が限られていたため、人生の大部分を犠牲的に過ごすことも多かったと聞いています。しかし、「男は外で働き、女は家庭をまもる」という昭和型の女性活動も時代と共に変化してきました。今日、女性のライフスタイルも大きく変わり、女性が男性と共に社会の多様な分野で、活躍する姿を見るようになりました。でも、女性が社会で活動すればするほど、活動するのを阻むジェンダー意識が社会の中にあり、まだまだ女性を悩ましています。女性が政治に参画する壁は厚く家事や育児の負担も重い現状です。

私の母方の祖母の例ですが、祖母は長い間共働き生活をしてきました。今思うと、仕事・家事・育児を両立してきたことは、大変だったと言います。フルタイムで職場の仕事に没頭し午後6時になると、保育所に子どもを迎えに休む暇なく祖母の家で待っている小学生の子どもを連れに行く。そして、夕食作り・風呂・明日への準備等々。次の朝は、保育所への日常を繰り返し、帰宅が遅く朝が早い祖父との間で、愚痴は絶えなかったと当時を語ってくれました。

女性や男性が、お互いの良さを認め合い協力しあってこそ、女性の社会進出はもっと高まるのではと思います。

「人権」とは誰もが持っている権利です。すべての人は、生まれた時から人としての価値があり、自由に人間らしく生きていける権利があるのです。

現在の女性が権利拡大運動をしてきた歴史的な例が数多くあります。例えば、社会においては政治的な権利の拡大を求めての運動・女性投票権獲得運動・女性の労働権や教育権等、社会的地位の向上を求め、権利獲得の運動をしてきたのです。女性たちがジェンダー平等を求めて、社会の様々な分野で活躍できるように権利獲得の運動をしてきた事が、今の女性の活躍につながってきているのだと私は思います。今では、若い女性の活躍が素晴らしいです。特に運動面において、サッカーや野球など男性に負けない動きをしています。高校野球のグラウンドで、ボールを渡す仕事をしていた女生徒に、これからの高校野球の姿を見ました。

私もこれからどんな方向に進んでいこうか思案中ですが、まだまだ女性としては、きびしいジェンダー平等世界の中で、女性と男性が、経験やノウハウを提供し合うことで、互いの良さを認め合い、協力しあい自分の特性を發揮できる生き方をしたいと思います。